

## 聖路加看護大学大学院課題研究要旨

### 妊娠期女性に対するブレスト・アウェアネス健康教育プログラムの開発と評価

ウィメンズヘルス・助産学専攻 博士前期課程 猪俣亜紀子

#### I. 問題の背景

近年、日本において乳がんは罹患数・死亡数ともに上昇し、女性にとって重大な健康課題である。しかし、乳がん検診受診率は欧米に比べ極端に低い。乳がん早期発見の重要な概念としてブレスト・アウェアネスが注目されている。これは、普段から自分の乳房へ関心に向け自分の乳房の状態を知ることが重視され、乳がんから自分を守るという概念である。妊娠期は助産師との関わりが深く、乳房への関心が高い時期であるため、ブレスト・アウェアネス普及には適切な時期であると考えられる。

#### II. 研究目的

妊娠期の女性を対象として、ブレスト・アウェアネス普及のためのプログラムを作成・実施し評価を行うことである。

#### III. 研究方法

研究デザインは、ブレスト・アウェアネス健康教育プログラムの結果評価と実施評価を行う評価研究である。プログラムは先行研究を参考に研究者が作成し、ブレスト・アウェアネスを基盤とした乳がん早期発見のための知識・態度・行動を身につけることを目的とした。成人教育に配慮した“academic detailing”アプローチを用い、講義・演習・意見交換などで構成した1時間のプログラムを9回実施した。各回の参加者は2～7名であった。

プログラム評価のために、研究者が作成した質問紙を用いて、「ブレスト・アウェアネスに関する知識(以下、知識)」「ブレスト・アウェアネスに関する態度(以下、態度)」「ブレスト・アウェアネスに関する行動(以下、行動)」「プログラム参加満足度」から結果評価を行い、「アウトプットの状況」「実施方法と内容の適切性」から実施評価を行った。

なお、知識・態度についてはプログラム前・後・1ヵ月後の3時点において、行動についてはプログラム前・1ヵ月後の2時点において評価を行った。知識、態度については平均点を算出し反復測定一元配置分散分析を行い、知識はCochranのQ検定を行い正答率の変化をみた。また、行動に関してはMcNemar検定を行った。

#### IV. 結果

研究協力者は 30 名の妊婦であった。知識の得点に関しては、プログラム実施による主効果がみられ( $F=30.894$   $p<0.001$ )、プログラム参加前からプログラム参加後( $p<0.001$ )またはプログラム 1 ヶ月後( $p<0.001$ )にかけての平均点は有意に上昇し、プログラム直後からプログラム 1 ヶ月後にかけての得点はやや低下したが、有意差は認められなかった。また「罹患しやすい年代」( $p=0.012$ )「乳がんの罹患状況」( $p<0.001$ )「乳がんの発生部位」( $p=0.039$ )「適切な医療機関」( $p=0.007$ )の項目においては有意差が認められた。態度における合計得点( $F=31.777$   $p<0.001$ )および「乳がんとの距離感」( $F=19.573$   $p<0.001$ )「ブレスト・アウェアネス実践意欲」( $F=29.717$   $p<0.001$ )の 2 つの因子の得点においてはプログラム実施による主効果がみられた。合計得点と 2 つの各因子においてプログラム参加前からプログラム参加後またはプログラム 1 ヶ月後にかけて有意差が認められた。行動については、乳房を見たり触れたりしている実施者が、プログラム前 7 名(23.3%)に対してプログラム 1 ヶ月後では 21 名(70.0%)となり有意( $p<0.001$ )に増加した。また、プログラム参加満足度において 27 名(90.0%)が「満足」と回答した。

#### V. 結論

妊娠期の女性を対象としたブレスト・アウェアネス健康教育プログラムは、ブレスト・アウェアネスに関する知識・態度・行動の変化への影響が認められ、プログラム参加満足度が高かったことから本プログラムの有効性が示唆された。また、実施評価から妊娠期や産後の生理的な乳房の変化を取り入れることの必要性、妊娠・産後のみならず他職種との連携によって女性のライフステージにおけるさまざまな場面で繰り返し乳がん啓発を行っていくことの必要性、本プログラムを母乳クラスの内容に取り入れること等の示唆を得た。